

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

データサイエンス教育運営会議	
(責任者名) 藤間 真	(役職名) データサイエンス教育運営会議長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>全学部の学生に本プログラムの履修機会を提供するため、全学共通科目として「データサイエンス基礎」を開講した。2年目となる令和6年度は525名(昨年度:245名)の履修があった。履修者の内、386名(73.5%)(昨年度:65.7%)が単位修得に至っており、履修者数および単位修得率共に増加しており、リテラシーレベルとして適切であったと考える。</p> <p>本プログラムの出席状況は「90%以上」が73.8%で学生の科目に対する学習意欲が高いことが伺える。また、本プログラムの履修を促すための対策である「完全オンデマンド化」について、「対面授業と同程度に知識は習得できたか」の項目では、52.7%(昨年度:54.5%)が「そう思う」と回答し、「対面授業とオンデマンド型授業両方で開講されていた場合、どちらの形態を受講するか」の項目では、68.3%(昨年度63.6%)が「オンデマンド型」と回答しており、完全オンデマンド化の需要と成果については効果的であると評価している。</p>
学修成果	<p>受講学生アンケートの「この授業は、総合的に判断して有益な授業でしたか」の項目に対し、50.7%(昨年度:54.5%)が「そう思う」と回答し、40.4%(昨年度:36.7%)が「どちらかと言えばそう思う」と回答していることから、本プログラムの運営は総合的に適切であり、受講生にとって高い学習成果があったと考える。</p> <p>更に、自由記述の項目では「オンデマンドのため何度も見返してより深く理解することができた」のようにオンデマンド学習への好意的な意見が多く、「先生の説明が丁寧で分かりやすい」と評価する声が多いことから、講義の方法および内容ともに学習成果を高めるものであると考えている。</p> <p>ただし、「音量が小さい」、「資料が見えづらい」との講義資料への指摘があること、「内容が難しい」という声も一定数あることから、本プログラムの教材の見直しが必要であると考ええる。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>受講学生アンケートの「この授業をどのくらい理解できましたか」の項目に対し、回答者の20.1%(昨年度45.5%)が「良く理解できた」と回答し、57.4%(昨年度54.5%)が「まあまあ理解できた」と回答している。昨年度に比して、「よく理解できた」が25ポイントも下がっていることについて検証の上、対策が必要である。</p> <p>更に、「この授業に集中して取り組むことができましたか」の項目に対し、回答者の39.4%(昨年度54.5%)が「そう思う」と回答しており、また、「どちらかと言えばそう思う」が48.7%となったことから、授業は履修者が集中して取り組み、理解を得られる内容になっていたと考える。</p> <p>ただし、自由記述において「内容が難しく課題ができなかったものがあった」、「(表計算ソフト)課題が難しすぎる」等の難易度に関し「難しい」ととらえる声が昨年度よりも増加傾向にあることから、本プログラムの講義内容について、履修学生からの意見を集約、分析し、改善していくことが必要であると考ええる。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>受講学生アンケートの「この授業の受講を同級生や後輩にお勧めできますか」の項目に対し、51.2%(昨年度:54.5%)が「そう思う」と回答し、34.5%(昨年度:27.3%)が「どちらかと言えばそう思う」と回答しており、85.7%(昨年度:81.8%)が同級生や後輩に推奨できるとしており、本プログラムの履修が、今後、多くの学生に波及していくことが期待できる。</p> <p>本プログラムの運営側が主体的となって履修推奨を取り進めることはもちろん、ホームページ等を用いて履修学生の実際の受講体験から得られた意見を学生に周知する活動が有効であろうと考えている。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>本プログラムは令和5年度に開設され、初年度は秋学期3クラスで開講し、履修者が245名(4%)の実績となった。2年目である令和6年は春・秋に計4クラス開講したが、目標である650名(10%)には届かず525名にとどまり、達成することができなかった。このことは、運営側主体の履修推奨だけでは訴求しきれていないことを意味しており、ホームページ等を用いて履修学生の実際の受講体験から得られた意見を学生に周知する活動が必要であると考えている。</p> <p>本学における履修登録は学期ごとに実施されることから、秋学期に向け、履修対象年次生への更なる訴求によって、更なる履修者数の増加を目指したい。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p> <p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p> <p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本プログラムは令和5年度に開設されたため、現状では教育プログラム修了者の進路等の情報は得られていないため、本項目について評価はできないが、修了者の進路等の情報は履修者数を増やし、本プログラムの内容精査、分析のために必要不可欠であると考えている。そのため、学生の進路支援を主管する「キャリアセンター」と連携し、毎年実施している「卒業生アンケート」に質問項目を設ける等、調査・分析方法を確立する予定である。</p> <p>本プログラムを実社会の現状に合わせ、実際のデータを得て、分析し得る体制が求められているとの認識から、「データサイエンス基礎」は、本学専任教員2名の他、多業種におよぶ産業界5社5名のゲスト講師によるオムニバス形式で開講されている。履修学生からは講義の都度、課題提出と意見を求めており、ゲスト講師にも共有の上、講義内容に関する意見を収集している。得られた意見についてはプログラム運営母体である「データサイエンス教育運営会議」で共有され、本プログラムの内容の精査、改善に活用される。なお、令和5年度の自己点検・評価報告において、「産業界の外部評価者が科目を担当しているため、今後は第三者としての外部評価者の視点を導入する必要がある」との課題認識について、令和6年度にはリテラシーレベルを認定されている他大学の運営組織と合同で「第1回MDASH情報交換会」を開催し、相互にプログラム内容や自己点検・評価活動について意見を交換した。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>リテラシーレベルのモデルカリキュラムに講義内容を展開しつつ、多業種5社5名の産業界からの実務者講師の協力を得て、実社会のデータについて学べる手法をとっており、履修学生が興味関心を得られるように科目内容を構成している。受講者アンケートの「授業内容は、あなたの興味・関心を引き起こしましたか」の項目に対し、回答者の82.1%（昨年度：91.2%）が「そう思う」、「どちらかというと思う」と回答していることから、受講者の興味関心を触発させる内容であったと考えている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>本プログラムの「データサイエンス基礎」を担当する2名の専任教員が講義全15回の内、14回において課題提出と意見を求めており、昨年度に引き続いて履修生から講義回ごとに意見を収集し、即時、即応的に科目運営の改善（PDCAサイクルの確立）ができたと考えている。講義は学生の理解度の状況を見て判断しつつ、進めていく必要があり、学生の意見を得たことで、これが可能となっている。対面授業において、学生の反応をみながら授業運営することと同じく、完全オンデマンドの本プログラムにおいては、意見の収集こそ改善に向けた重要な因子であると考えている。なお、令和7年度には2名体制であった担当教員が1名となることから担当教員間の相互チェックが行えないため、「データサイエンス教育運営会議」において半期ごとに授業評価のチェックが必要であると認識している。</p>